

「見えないお金」の重み

京都府・京都府立洛北高等学校附属中学校 3年 小松 万希子

「お金」と聞いて、まず一体何を思い浮かべるだろうか。たいていの人は、100円玉や1,000、5,000円札といった、硬貨や紙幣を思い浮かべると思う。

また私は、物を買うときには買いたいものに見合った紙幣や硬貨と交換して買うのが当たり前だと思っていた。

けれど最近インターネットなどをよく使い始め、必ずしもそうとはいえない場面に度々遭遇するようになった。「電子マネー」の存在だ。これによって、私の中にある「お金＝紙幣や硬貨」という常識が覆されてきている。

インターネットで物を買いたいとき、直接物と紙幣を交換するのは難しい。そこで電子マネーなどが活用され、インターネットでも買い物ができるようになった。電子マネーは、インターネットなどで使える「仮想通貨」というもので、番号などを入力すれば画面の中でお金を払うことができる。法的には貨幣ではないらしい。けれど、そこには確かに実際の貨幣と同じだけの価値があるし、電子マネーの105円で、100円玉と5円玉硬貨を払った場合と同じものが買える。

では、電子マネーと貨幣の違いは何か。言うまでもなく、貨幣は実際に存在するが電子マネーは存在しない、ということだろう。この場合の「存在する」とは、つまり「質量を持つ」ということだ。硬貨は触ることができるが、電子マネーには触れない。電子マネーはあくまで「仮想」の通貨なのだ。

この違いは、あまり意味の無いように見えて、実はとても大きな違いだと思う。電子マネーで物を買うときには、財布の中身を確認することも、お釣りが少なくなるよう払う硬貨を選ぶことも必要ない。ただ画面の文字を追い、少し計算し、クリックすれば済む。確かに便利なことだと思うが、このとき私は、画面の後ろで忙しく行ったり来たりしている紙幣や硬貨の存在をしばしば忘れがちになるのだ。お金を払ったという実感が湧かない。たったいま、商品を買った代わりにいくらかのお金を失ったということをはっきりと認識できないような気がする。

実際、私にはこんな経験がある。中学生になり毎日携帯電話を使っているうちに、私は携帯電話で音楽を聴きたいと思うようになった。そこで、携帯電話からウェブサイトへ繋ぎ、好きな音楽をダウンロードしようとしてみると、それにはいくらかのお金がかかった。大体300円程度だったと思う。その300円を払うのはあまりにも簡単で、ボタンを何回か押すだけで私の携帯から見事好きな曲を聴けるようになった。私はとても満足したし、一連の操作が意外と簡単であったことに驚いた。

それからしばらく経って、何気なく普段は見ない携帯電話の料金の請求書を見してみると、そこには確かに音楽を買った分の料金が記載されていた。そこで初めて私は音楽を買ったことを思い出し、そのことに対する認識のなさを思い知るようになった。結局、両親と相談し、そういった有料情報はお小遣いから払うことになったが、それ以来私は音楽を買っていない。

この一件で、もし私が携帯電話の料金の請求書を見ていなかったとしたら。私の買った音楽の代金は他の数字に紛れ、お金を払ったこと、つまりは今携帯電話で聴いている音楽はお金と引き換えに手に入れたものであることを、私はずっと忘れていたかも知れない。知らないうちにどこかの口座から引き落とされ、知らないところでいくらかお金が減っている、といったことにもなりかねなかっただろう。

考えてみれば、電子マネーに限ったことではなく、日常生活の中には「見えないお金」、が満ち溢れている。先ほど口座という言葉がでてきたが、その口座だって見えないお金を支払うための、立派なツールとなっている。

確かに、それらの「見えないお金」によって私たちの生活はとても便利になったことも事実だ。寧ろそれがないと成り立たないといってもよいほどだ。けれど、いくら見えないからといって、その存在を忘れてたり、ないがしろにしてはいけないと思う。

私が将来大人になって、何か大きな買い物をしたとき、見えないお金を本格的に扱うようになったときは、このことを忘れないでおきたい。そうすれば、日々手にするお金や、失っていくお金の重みを、もっと真剣に受け止めることができるだろう。